

2. イサザ等特産種資源対策研究費

1) イサザの産卵基体設置試験結果

井出充彦・吉岡剛

【目的】イサザの漁獲量は昭和61年に567tであったものが平成5年以降平成7年までは1t以下となった。平成8年はわずかながら回復傾向を示し31tとなった。しかし、今後どの程度まで回復するかは不明であり、増殖場造成による資源の増大をはかるための基礎研究とするため、投石による増殖場造成試験を行った。

【方法】4月15日に志賀町近江舞子湖岸の、砂礫底上に投石を行い、ほぼ1週間ごとに6月6日までイサザの産卵状況を観察した。投石はおよそ30×30cmの板状で表面に凹凸のある石を、湖岸より6～8m(地点1 水深約1m)、12～14m(地点2 水深約1.5m)、18～20m(地点3 水深約2m)の3地点に1地点2×2mの範囲で行った。また、石の状態が一層浮き石の状態になるように、潜水者が投石後の石を整頓した。

【結果】投石1週間後にはイサザの産卵床が確認できるようになり、5月20日まで見られた。産卵床数のピークは5月1日で、沖合の地点ほど産卵床の密度が高かった。産卵床の数は地点1、2、3がそれぞれ3、32、93床で、投石面積1㎡あたりそれぞれ0.75、8.00、23.25床となりSt. 3では明らかな産卵基体としての効果が見られた。

なお、地点1では5月1日にヌマチチブの産卵が見られ、5月8日にはイサザの産卵床が1床であるのに対し、ヌマチチブの産卵床は9床となった。それ以降地点1はヌマチチブの産卵床のみとなった。地点2および3は5月8日以降にヌマチチブの産卵床が見られたが、特に地点3はイサザの産床数と比較してごくわずかであった。ヌマチチブはイサザよりも浅い場所で産卵床をつくるものと思われた。

これらのことから、湖岸より約12～20m、水深約1.5～2mの地点に投石することにより、産卵場所を造成することが可能であると思われた。



写真1 産卵基体として使用した石.

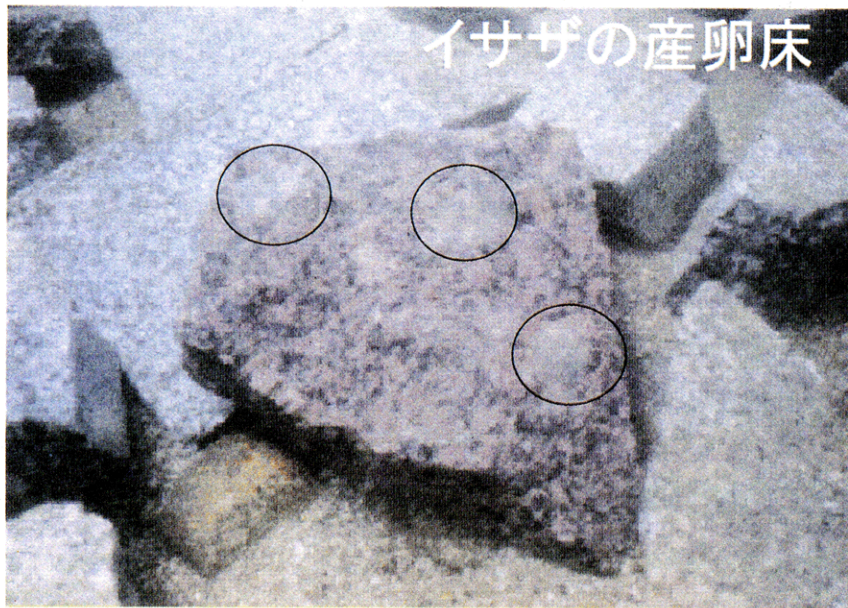


写真2 産卵基体に作られた産卵床.

石を反転させて産着状況を観察している状態.